

たまのよこやま



発行

(財)東京都生涯学習文化財団

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033

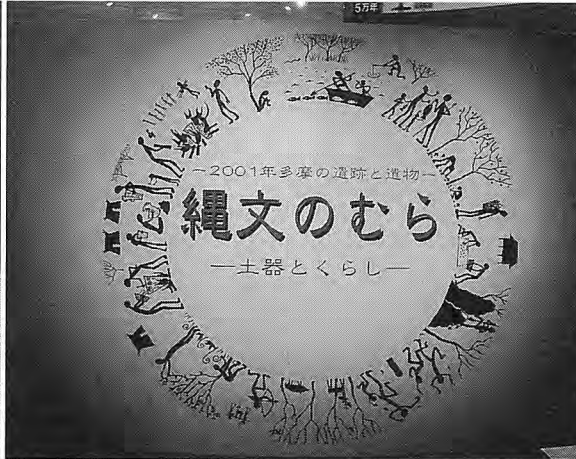
多摩市落合1-14-2

☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No. 52

平成13年7月10日

<http://www.tef.or.jp/maibun/>



▲ 親子ふれあいキャンペーン

▲ 大形土器等の野焼き

厳しい経済環境と調査事業

所長 尾崎 眞幸

長く続く厳しい経済環境のなかで、公共事業の圧縮や民間企業による開発の低迷は、埋蔵文化財の調査事業の経営にとって大変不安定なものとなっています。このことは、当センターだけでなく、全国の埋蔵文化財事業関係者にとっての共通の問題となっていることと思います。特に当センターは、基本的に公共事業の分野に関わる調査事業を行なっているため、公共事業の圧縮による調査事業への影響は大きなものとなっています。かつてバブル経済が大きく膨らんでいた頃には、センターの調査受託事業費は四九億円にのぼったこともありましたが、しかし今日では、大規模な調査事業の減少や経費の削減などにより、平成十二年度では約二八億円となり、バブル期の6割弱にまで落ちています。このような中で、いかに安定的に事業量を確保し、効率的に事業を進めていくことができるかが、今日のセンターの大きな課題になっています。

埋蔵文化財に関するニュースは、毎日のように新聞・テレビで報道されています。ある時は歴史的な大発見であったり、またある時は先人たちの生活のにおいを感じさせるものなどが出土し、否が応でも都民の埋蔵文化財に対する関心も増し、埋蔵文化財保護事業への期待が高くなっているものと思います。

この都民の期待に応えていくためにも、事業の安定的な推進を図るとともに、一つひとつの調査を的確にかつ効率的に実施し、専門的な見地からの調査結果を都民に伝えていかなければならないと思います。

遺跡だより ⑥0



今回紹介する遺跡は、杉並区方南町にある方南町峰遺跡です。

方南町峰遺跡（方南峰遺跡・峰遺跡）は、山の手台地北部の善福寺川右岸に位置しています。

遺跡は杉並区内の善福寺池に水源を発する善福寺川と神田川（神田上水）の合流地点を東に望み、武蔵野台地が西から東に向かって張り出す台地の先端部に位置しており、「峰（峯）台地」と呼ばれる地域にあります。

峰台地のなかでもとりわけ善福寺川が蛇行を繰り返す下流域は旧石器時代から古代、中世・近世にいたる遺跡が数多く存在することが広く知られていました。

今回の調査は、都営方南第2団地建て替えに伴うもので、新たに建築

される建物部分の900㎡を対象面積として調査を実施しました。

方南町峰遺跡の調査は、1950年に今回の調査地点の西に位置する杉並区立泉南中学校の校舎建築工事の際に、多数の土器等の遺物が出土し調査され、縄文時代中期から古墳時代にかけての大集落であることが確認されたことを端緒として、過去に3地点・4次にわたり実施されてきました。今回の調査地点は、方南町峰遺跡（遺跡群）・峰台地のほぼ中央にあたる部分が対象となりました。



縄文時代中期前半の住居跡

調査の開始にあたっては、遺構・遺物包含層等は、1953年に建築された



縄文時代中期の土坑群

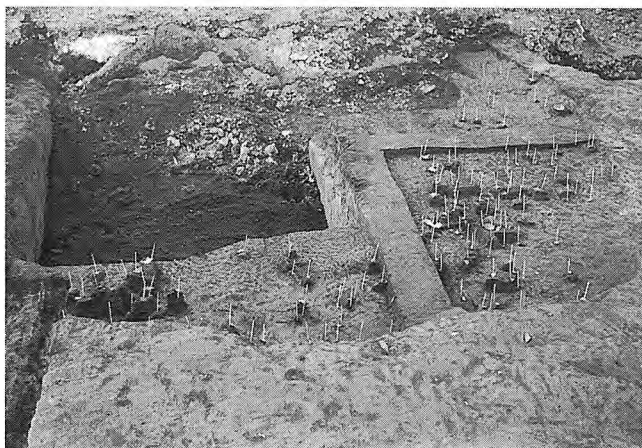
旧建物により大半が消滅・除去されていると考えられていましたが、調査の結果、予想以上に良好に残っていたことが明らかになりました。

調査の結果検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡7軒・竪穴状遺構5及び土坑類、弥生時代後期の住居跡2軒、近世の土坑6・溝4・ピット群と多様・多数のものでした。

また、当初は旧建物の建築等で除去されていると考えられていた遺物包含層も、平安・奈良時代・古墳・弥生時代、そして縄文時代と良好に遺存しており、出土した遺物も総数で、3万3千点を上回りました。

今回は900㎡の調査ですが、旧石器時代から近世にいたる遺構・遺物を包蔵する方南町峰遺跡群のうち、縄文時代中期の遺構群が展開している地点の位置が明確になりました。今後の遺物整理作業過程で、当時のヒトとモノの交流の一端が明らかになると思われます。また、弥生時代後期においては、環濠の外側にも当該期の集落が存在していたことが明らかになりました。今後の整理作業を経て、方南町峰遺跡の一端がより明らかになることをご期待ください。

（山口慶一主任調査研究員）
（武井利道調査研究員）



弥生時代後期の住居跡

文化財講座 <42>
大江戸掘りもの帖 ~十九~

汐留遺跡出土の「鍋島」

「鍋島」は伝世品として伝わっているものも多く、これらに関しては陶磁器展などで展示されたり様々な研究が行なわれてきましたが、遺跡から出土した「鍋島」は、例が少なく、研究例も少なかったのが現状でした。ただ、最近では、出土事例が徐々に増えつつあります。ここでは汐留遺跡で出土した「鍋島」について紹介します。

遺跡で出土した「鍋島」について紹介します。

「鍋島」は、佐賀県鍋島藩の御用窯で、將軍家や大名家等への献上品として焼かれたもので、一般には売買されなかつたといわれています。献上品として作られるため、その製作に際しては、最高の技術を持った職人たちが、細心の注意を払って製作され、材料は最良のものが用いられました。その結果、「鍋島」は、古九谷・柿右衛門と並んで、江戸時代における磁器の最高峰と称せられています。

「鍋島」には、色絵・染付・青磁・青磁染付・白磁があり、時期的には、初期（一六七〇年代～一六八〇年代）・盛期（一六八〇年代～一七三〇年代ころ）・後期（十八世紀後半以降）



汐留遺跡出土の「鍋島」

に分けることができます。器種には、碗・皿・鉢・壺・瓶等がありますが、主体は皿であり、その器形は木盃形高台皿という特徴的なものです。

汐留遺跡の龍野藩脇坂家屋敷と仙台藩伊達家屋敷からは、完形に近い資料及び半完形の資料が二十個体、破片資料が約二百五十片出土しています。これらの資料は、ほとんどが脇坂家の屋敷地から出土しており、しかも火を受けた資料が多いことが大きな特徴となっています。時期的には、盛期と後期のものが多く、初期製品の出土例は希少です。

数多くの「鍋島」が出土している龍野藩脇坂家は、赤穂藩の隣に位置する石高五万石余りの外様大名ですが、十八世紀末から幕末にかけては、寺社奉行や老中などを歴任し、

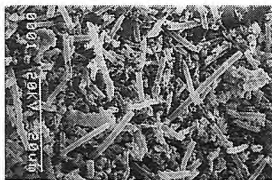
幕制内で要職を任されていた時期がありました。

脇坂家から出土している「鍋島」の中には、十八世紀後半以降に作られたと思われるものも数多く含まれており、幕制の要職にあった時期に献上品としてもたらされた可能性も考えられます。しかし、この時代の

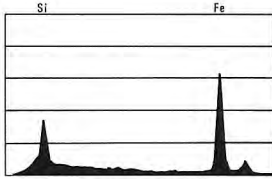
保存科学室() ぼれ話 (十六)

赤色顔料について(5)

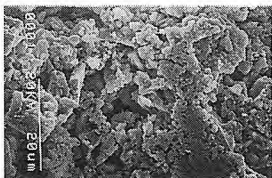
前回までの酸化第二鉄が主体の赤色顔料には、①パイプ状物質、②黒泥土中の繊維と鉄化合物、③火山灰と粘土層の境目から得られる褐鉄鉱から作られた3種類を説明してきました。その結果、パイプ状物質以外は、地元産の褐鉄鉱から赤色顔料が作られていることが明確になりました。それでは、このパイプ状物質はどこで生産されたのでしょうか。



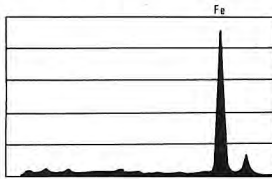
第1図 パイプ状鉄化合物



第2図 パイプ状物質のX線スペクトル



第3図 赤鉄鉱(鏡鉄鉱)の微細粒子



第4図 赤鉄鉱(鏡鉄鉱)のX線スペクトル

この問題を解くために、母材を求めて、赤鉄鉱の産地に出かけました。場所は、新潟県新発田市を流れる加治川の upstream にある赤谷鉱山の河川敷です。ここで採取した赤鉄鉱(鏡鉄鉱)を擦り合わせてできた酸化第二鉄を分析したのが、第3・4図となり、SEM像では擦りつぶした粉と六方小系結晶の残片が観察されます。鉄の純度は高く、パイプ状物質は観察できませんでした。次回は別種類の赤鉄鉱を求めて分析を進めます。(上條朝宏主任調査研究員)

出土例には、下級武士の武家屋敷や町人地からの出土例があることから、「鍋島」というブランドとしての価値が、低下あるいは多様化していた可能性もふまえて、脇坂家から出土している「鍋島」の性格を考えていかなければいけないでしょう。(西澤 明副主任調査研究員)

尾張藩上屋敷跡遺跡で
 大名家の「纏」発見！

平成8年度に調査をした土坑の中から漆膜と脆弱な木胎、金輪等が潰れた状態でまともって検出されました。その後の整理作業を通して復元を試みたところ、検出された漆膜と木胎は「纏」の頭部にあたる部分の残欠で、漆膜の上には「八」の字が描かれていることが判明しました。残存していたのは、頭(陀志)の約8割と頭を竿に固定していた金具類、竿(柄・心棒)、馬簾(ばれん)で、頭の本質部は腐朽が進み、残っていたのは表面に塗られた膜状の漆だけでした。



「八」部は強調して表示

纏は、戦場における馬印の一種として、16世紀以降に用いられ始め、江戸時代に入って大平の世になると、消防組織のシンボルとして用いられるようになり、今に受け継がれています。

平成13年度広報普及事業のご案内(7月～)

日	時	行事名	内容
7/14(水)	13:30~16:00	第1回文化財講演会	演題「都心に眠る縄文文化の再発見—国史跡中里貝塚とは—」 講師 中島広顕(北区教育委員会)
8/9(木)	9:15~16:00	縄文土器作り教室	縄文土器製作と野焼き 参加費1,000円(保険料、材料費)
8/10(金)	9:15~16:00		小学5年生以上(小学生は保護者同伴) 往復はがきで応募
9/8(土)	9:15~16:00		7/25必着(多数の場合は抽選) 3日間参加
9/12(水)	13:30~16:00	第2回文化財講演会	演題「多摩丘陵における縄文集団」 講師 可児通宏(都文化課学芸員)
10/13(土)	13:30~16:00	第3回文化財講演会	演題「いにしえ人の顔」 講師 佐藤正好(茨城県立歴史館)
10/27(土)	13:30~16:00	とうきょう親子ふれあいキャンペーン	火おこし体験と遺跡庭園「縄文の村」の探索 小学生と保護者対象(応募者多数の場合は抽選)
11/10(土)	13:30~16:00	第4回文化財講演会	演題「江戸のあかり—道具と使い方—」 講師 小林 克(東京都江戸東京博物館)
1/16(水)	13:30~16:00	第5回文化財講演会	演題「文化財科学のあゆみ」 講師 門倉武夫(当センター保存科学室)
2/6(水)	13:30~16:00	第6回文化財講演会	演題「縄文のむら—Na72遺跡からみて—」 講師 丹野雅人(当センター主任調査研究員)
平成13年度 常設展示			『縄文のむら—土器とくらし—』

- 縄文土器の野焼き 5/12(水) 見学者 126名
- とうきょう親子ふれあいキャンペーン 6/9(土) 参加者 21組 59名
- 映画鑑賞会 6/23(土) 参加者 117名

日本学術振興会
 科学研究費補助金の交付

当センター職員5名が内定。

比田井民子「地形変遷から考える

旧石器時代遺跡の解明」

丹野雅人「縄文時代の住居構造に関する一視点」
 鶴間正昭「古代金属器にみる国際交流」

分室の開設

4月以降、新規の分室です。
 市ヶ谷西分室 千葉基次係長、

秋川分室 竹尾 進、松井和浩
 岡崎完樹係長、
 竹田 均、岩橋陽一

秋葉原分室 千葉基次係長、
 及川良彦、小島正裕、
 栗城讓一

組織改正と人のつぎ

4月より総務課庶務係、調査センター係を管理係、施設係を調整係とし、新たにスタートしました。

4月の定期異動では
 浅野秀治(所長)、中内英樹(庶務係長)、西原一美(調査センター係長)、春名智美(庶務係)が転出し、古坂節子(施設係)中島達夫(都嘱託員)が退職しました。

後任に、尾崎眞幸(所長)、原富子(管理係長)、川橋義夫(管理係)、二瓶純一(管理係)、三橋透(都嘱託員)が着任しました。



古紙100%配合の再生紙
 を使用しています。